# 20世紀初頭 英領アフリカにおける 女子教育

山田肖子

## はじめに

19世紀の終わりから第二次世界大戦前にかけては，ヨーロッパ列強がアフリカにおける植民地支配を制度化し，確立した時期である。そして，新しく形成されつつある植民地の臣民であるアフリカ人をどのように教育するか，というテーマは，当時，ヨーロッパ人やアフリカの知的エリートの間で多くの関心を集めていた。20世紀初頭には，欧米で人格教育の重要性がクローズアップされていたが，そうした考え方は，そのままアフリカの教育論議にも持ち込まれた。アフリカにおいて，教育を通じて育てられるべき『人格』とはどのようなものなのか。さまざまな意見が出されたが，それらに共通していたのは，教育は，「知的な考え方はヨーロッパ風でありつつ，感情的にはアフリカへの帰属意識を持ち続ける」ロールモデルを養成すべきだ，という点であった。

アフリカの大衆は，ミッション学校が導入された初期には，ヨーロッパ人に子供を人質に取られるのだと思って学校に反発した。しかし，20世紀初頭には，すでに男子を学校に行かせることの利点がアフリカ人の間で認識されるようになっていた。この頃までには，西洋型の教育を受けた人々が，伝統的な社会構造から独立した新しいエリート階級を形成しており，教育がもたらす西洋文化とホワイトカラーの仕事への憧れは，学校教育への期待を高めていた。他方，子供を学校に行かせる家庭が非常に限られていた当時において，女子教育への支持は低かったと言わざるを得ない。

そのような状況下，アフリカで女子教育を推進した人々は，教育に何を期待したのだろうか。第１に，それは男子の場合と同様，人格教育なのであるが，女子教育の議論には，特に当時のヨーロッパの家庭観，夫婦観，性差の考え方が色濃く反映されていた。また，当時，女子を教育することによって家庭を，社会を変えていこうという，女子を変化の媒体とする発想が生まれたが，これは現在の開発援助でもよく用いられる考え方であ

る。生活を向上し，経済を発展させるために，ある社会の既存の価値観を外来の価値観で置き換えることが，どこまでは妥当でどこからが行きすぎなのかという判断は，時代や立場に影響される微妙な事柄である。

本稿では，まず，20世紀初頭のアフリカにおける女子教育が，どのような発想・価値観を背景に生まれてきたのかを示す。そのうえで，女子を媒介として新たな家庭観を植え付け，社会を変えようとした教育が，女生徒にどのように体験され，内部化されていったのかを分析する。特に実践に関しては，筆者は1927年にゴールドコースト植民地（現在のガーナ）に設立されたアフリカ初の公立共学校－アチモタ学校（Achimota School）－に注目して調査を行った。アチモタに関する史料のほか，2002年夏に，1930年代末までに同校を卒業した者13名（うち女性５名）にインタビューしている。本論では，紙幅の都合から，女子教育の実践例を多く紹介することはできないが，ゴールドコースト以外の英領アフリカや仏領アフリカでも，女子教育観や実践に高い類似性があることは他の研究者も報告しているところである（Barthel［1985］; Gaitskell［2002］）。

## 1．イギリスの女子教育観
### ――家政婦ではなく配偶者――

20世紀初頭のアフリカの教育論議を理解するためには，ビクトリア朝イギリスのブルジョワ独特の道徳観を知っておく必要がある。ビクトリア時代（1837－1901年）には，男女の社会的役割が明確に分化され，それに伴い，正しく女性的，あるいは男性的な役割を果たすために求められる人格もかなりはっきりと規範化されたのであった。男性は，弱い女性を守り，国家のために自己を顧みずに英雄的に奉仕する紳士であることが求められた。他方，女性は，男性に庇護されて家庭にあり，ボランティアとして貧民に奉仕する慈悲心を持つことは重要だが，男性のような社会的活動に参加することははしたないとされた。それまでの時代や，労働者階級においては，子供も女性も労働するものであったのが，ビクトリア朝のブルジョワ社会では，女性は家庭生活を切り盛りし，男性は社会活動を担当し，子供は遊んで勉強する，という，性や年齢による分業がなされ，また，その価値観に沿わないものは，野蛮で遅れていると考えられた。家庭生活を切り盛りすると言っても，女性に期待されていたのは家政婦のような労働ではなく，むしろ，必要なら家政婦を雇って，家庭を運営する見識や判断力であった。要するに，この時代の中･上流の女性には，教養ある男性の配偶者として，文明的な家庭生活を送れるだけの教養と人格を授ける教育が必要と考えられていたのである。そして，そこで育てられるべき人格は，男性のそれとは大きく異なっていた。

アフリカの植民地における教育が議論されるようになったのはビクトリア時代末期以降で，イギリス本国の道徳主義的教育観を色濃く反映していた。1914年には，イギリスのミッション団体が共同で『植民地教育検討会』を開始し，やがてその中から『女性・女子教育検討会』が生まれた。これらの教育検討会は，ミッション団体の重要な布教の場である学校を政府の干渉から守りつつ，イギリス政府の植民地教育政策の形成に影響を及ぼすことを目的とした。1923年，イギリス政府植民地省（Colonial Office）に設立された『熱帯アフリカにおける現地人教育に関する諮問委員会』は，数々の教育に関する政策や指針を公布したが，それらはミッション団体の『教育検討会』の提言をかなり採用している。

現存するこれら検討会や委員会の議事録と書簡からは，当時，アフリカでの女子教育がどのように考えられていたかが見てとれる。まず強調されるのは，男子にも共通する『人格教育』の理念である。知識だけを詰め込んでも，頭でっかちで父祖伝来の文化を見下すような人間になっては意味がない。アフリカの大衆への奉仕の精神を持ち，大衆をリードしていく人格を育てなければならない，という考えである。女子教育で特に付加されたのは，「男子を教育しても個人しか変えられないが，女子教育は家族，ひいては社会を変えられる」という論理であった。なぜなら，女性は家庭を守り，子供を育てるからである。教育と母性，結婚生活がこれほど関連づけて議論されたことはきわめてビクトリア朝的である。教育を受けた男性が，自分に見合った教養ある女性を見つけられなければ，家庭は正しく切り盛りされず，子供はよく育たない。男子への教育が進み，エリート階級が形成されるほど，配偶者としての女子の教育の必要性は強く認識されたのであった。

ヨーロッパ人の目には，アフリカの女性は社会的に低い立場に置かれているように見えた。例えば，女子教育推進者であったアチモタ学校初代校長・フレーザーは，ゴールドコーストでは，男性が女性より先に座るとか，公の場に出てくる代表者が女性より男性が多いなどと報告している。また，アフリカには母系社会が多いが，母系社会では母が子供に与える影響がことに大きいので女子教育が大事だという主張もイギリス人の間でなされていた。

こうした考え方には，ヨーロッパのジェンダー観，女子教育観をアフリカに当てはめることで生じるゆがみや偏見が垣間見える。例えば，フレーザーは，アフリカで女性が公の場に出ないのは女子教育が足りないせいだとしているが，女性をよき家庭人にしようというイギリスの女子教育が，女性の社会参加を促進するという論理には無理がある。また，母系社会というのは，一部のヨーロッパ人が考えたような，母親が家庭に納まっている社会のことではない。むしろ，女性は伝統的社会の運営・意思決定に積極的に関わる社会的存在なのである。父系，母系を問わず，男性よりむしろ女性が農作業などを担っているアフリカの社会は多かったのだが，農業などの家の外での活動は男性の世界，家の中での活動が女性の世界，という価値観を持ち込むことで，ヨーロッパ人は既存の労働のあり方をくつがえした。ビクトリア朝的価値観による社会や家族の変革は，さまざまな場で行われたが，女子教育の議論は，特にそれを象徴的に現していると言えるだろう。

## 2．アフリカにおける女子教育の実際

ヨーロッパ人がこのような独特の価値観で女子教育に関する議論を展開していたとき，アフリカでは女子教育はどのように受け止められていたのだろうか。

当時，アフリカ人の間で女子を就学させようという欲求は男子のそれよりかなり限定されていた。就学する女子のほぼ全員がキリスト教徒の子供であり，かつ，教育水準の高い父親を持つケースが多いという報告は，複数の史料に見られる。要するに，女子教育の議論に参加したのは，ヨーロッパ人のほかは，すでにヨーロッパ文化やその価値観に親しんだアフリカ人エリートだけだったということである。

筆者のインタビューや史料によれば，共学だとだいたい男女比は３：１だったと思われる。男子校より数は少ないが，女子校もあった。エリート家庭の子供である女学生に，雇用のための技術を

教える必要はあまりなかったが，女子教育には裁縫の授業がつきものであった。ラブデールという，南アフリカの職業訓練学校ですら，裁縫のコースを取って，本当に縫い子になったのは全女子の３分の１だけだったという（Gaitskell［2002：106］）。裁縫の授業には，しかし，象徴的な意味があった。女子は，農作業や肉体労働に携わるべきではなく，家の中で縫い物などをして過ごすものなのだという価値観の伝達である。英領アフリカでは，キリスト教ミッションの女学校が植民地政府の補助金を受けるためには，裁縫の授業を行うことが義務付けられていたが，このことは，裁縫が女子教育でいかに重視されていたかを示している。

さて，「家庭の切り盛り」が，教養ある男性の配偶者としての女子に求められる素養だったわけだが，それは学校でどのように教えられたのだろうか。当時は，教室での講義よりも実際に体を動かしたり体験することで価値観や行動規範を身につけることが重要視されていた。男子は，スポーツや学生会活動などを通じて集団への忠誠心や自律的組織活動などを学んだが，女子の場合は，寮の掃除や女性教員の手伝いから西洋的家庭の切り盛り法を学んだのである。

こうした「家庭の切り盛り」の教育がどのように行われ，生徒に内部化されたかは，筆者のアチモタ卒業生とのインタビューから見てとれる。

「アチモタ学校の教育が自分の人生に何らかの文化的影響を及ぼしたか」という筆者の質問に対し，男性回答者は西洋の知識・価値観や服装などについての一般的言及が多かったのに対し，女性の回答のほとんどは，ヨーロッパ人の家庭生活に関するものだった。１人は，彼女がヨーロッパ人教師の生活スタイル，「家の切り盛りのしかたや白人が妻を扱うやり方をコピーした」と述べた。少なくとも彼女の目には，ヨーロッパの男性は妻をよく扱っているように見え，彼女は，ヨーロッパ風の結婚生活に対する良好な印象が，アチモタの男女学生をして，白人カップルのような結婚生活を望ましめたと考えていた。

女性たちは，毎週，寮を掃除するときに厳しく指導されたことをよく覚えていた。これは男子も同じようにやっていたはずだが，男性はほとんど思い出さなかった。掃除の後必ず，寮母の先生は検査して回り，どのグループが一番きれいに掃除したかを発表した。ある女性回答者によると，「自分のグループが一番だったときは，それは大きな歓び（great jubilation）を感じたものだ」そうである。別の回答者は，彼女のグループがごみをきちんと片付けなかったときに，「無礼な行為」だと叱られたのを覚えていた。

もうひとつ，女性回答者しか言わなかったのは，アチモタで教育を受けたおかげで，謙虚さと倹約の態度が身についたというものである。これは，おそらく寮において寮母と生徒の交流の中で伝えられた，女性に限った人格教育の側面であろう。前述のとおり，当時の女子教育の目的は，教育を受けた男性の配偶者としてのよき妻，よき母を育てることであった。アチモタ学校でもその理念は貫かれたが，この学校からのメッセージを，女学生は非常によく吸収したと言えるだろう。

アチモタの卒業生は，男性も女性も共学を高く評価していた。彼らがアチモタで人生の伴侶を見つけた割合は非常に高い。例えば，ある男性回答者は，アチモタで男女の対等な友情を共に経験した２人の人間が結婚することは望ましいと述べている（彼の妻もアチモタ卒業生であった）。筆者の質問に対し，すべての回答者が，女子にふさわしくないとされた科目（一部のスポーツや手作業）はあったが，それ以外では，アチモタの女学生は完全に対等に扱われていたと答えた。回答者たちは，

対等に扱われたことで，少女たちは自信を持つことができ，それは彼女らを精神的に解放したと分析している。

## おわりに

アチモタ学校の例が示すように，植民地時代のアフリカにおける女子教育は，ヨーロッパ風の結婚のあり方やその中で女性が謙虚で倹約家のパートナーの役割を演じることを教え，その結果，それまであった夫婦の関係や家族の概念を変質させる効果があった。学校生活のさまざまな側面において，明示的，暗示的に発せられるメッセージによって，生徒たちは，ヨーロッパ風の結婚生活の価値を自分のものとして内面化した。そして，こうしたメッセージは，アフリカの「伝統」に対する誇りを持ち続けるようにというメッセージと並行して発せられていた。女子生徒の多くは，すでにヨーロッパ文化の影響を受けた，教育水準の高いエリート家庭から来ていた。彼女らの多くは，同じようにエリート教育を受けた男性と家庭を持ち，子供を育てたのであり，そのことが，ヨーロッパ的家庭観や文化の世代間での伝達に果たした意味は大きいだろう。

しかし，それは，植民地の教育に関わったヨーロッパ人が忌避した「過度の西洋化」のリスクを冒してまで推進するほど，アフリカ社会の発展に不可欠な変化だったのだろうか。ヨーロッパ人は，「アフリカの社会に根ざした大衆のロールモデル」を育てることを意図した。しかし，当時の女子教育は，西洋化したエリート階級の再生産，定着化には貢献したが，大衆にはほとんど影響を与えなかった。教育を通じた人格形成は，それを意図した人々の文化的背景や価値観を反映せずにはいられない。アフリカにおいて，女子教育を通じてビクトリア朝的家族をつくることに，どれほどの必然性があったのかは評価が分かれるところであろう。

**【参考文献】**

Barthel, Diane［1985］“ Women s̓ Educational Experience under Colonialism : Toward a Diachronic Model, ” *Journal of Women in Culture and Society*, 11（1）, pp. 137–154.

Gaitskell, Deborah［2002］“ Ploughs & Needles : State & Mission Approaches to African Girls ’Education in South Africa, ” in Holger Bernt Hansen and Michael Twaddle eds., *Christian Missionaries & the State in the Third World*, Athens, Ohio : Ohio University Press, pp. 98–120.

**【史　料】**

英国公文書館（Public Record Office〈PRO〉）
CO 96 Gold Coast Correspondence.
CO 98 Gold Coast Sessional Papers and Reports.

ロンドン大学アジア太平洋研究所（School of Oriental and African Studies〈SOAS〉，University of London）
The Conference of British Missionary Society and the International Missionary Council Archives（CBMS–IMC）.

オックスフォード大学ローズハウス図書館（Rhodes House Library, Oxford University）
Mss Brit. Emp.s. 283 Fraser.

（やまだ・しょうこ／政策研究大学院大学）